コルネリオ会

（防衛関係キリスト者の会）

ニュースレターNo.165

2024年4月

昭和のコルネリオ

この証は、三好つる江姉のご主人で軍人であった故三好政明兄の信仰に感動された、日本ホーリネス教団板橋教会の松村司師によるものです。三好兄召天後初めての墓参を川上村間谷でなさり同姉宅を問案してくださった際の証をクリスチャン新聞に投稿されたものです。

故人三好兄は、１９０３年（明治３６年）８月２８日、岡山県真庭郡川上村の農家の長男として出生。

１８歳で陸軍の現役を志願して、岡山５４連隊に入隊しました。２０歳で任官、班長に抜擢された。間もなく浜田連隊に転任し、曹長に昇任する。

１９３２年（昭和７年）４月、私が島根県の浜田在住時代に入信。クリスチャン軍人として信仰生活のスタートを切りました。入信がきっかけとなったエピソードがあります。

浜田連隊に多くの“新兵”が入隊してきたため、三好曹長は一日、ある中隊の検閲を行いました。ところが一人の新兵の手箱（注：兵隊の整理箱、日記、便せん、インクなどを入れる箱）の中に、ふちを赤く染めた一冊の本があるのを見つけ、とっさに命令口調でその兵に対して、「その本は何か？」と問いました。その時返ってきたのは「はい、キリスト教の聖書であります。」との返事でした。三好兄はそれまでキリスト教の「キ」の字も知らなかった為、てっきり共産主義の宣伝書と勘違いし「何！ 聖書！ 新兵のくせに生意気な！ おれが預かっておく。」と言って取り上げたのが、彼とキリスト教との「出会い」となりました。実はその新兵とは、筆者の牧会した旧浜田ホーリネス教会の折見兄で浜田郵便局員でした。

一方、聖書を持って帰った彼は、俗に「怖いもの見たさ」とあるように、生まれて初めて聖書を読んでいくうちに、一つの聖言にぶつかりました。その聖言とは彼の生涯の愛唱聖句となったもので、そこには「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、命の光を持つのです。」（ヨハネ８章１２節）とありました。

彼は曹長の制服を着て来訪され、独身時代の私は一瞬驚きましたが、演習以外は熱心に礼拝に出席、信仰に進み、入信後の同兄の変化の第一は、“禁酒禁煙”を断行されたことです。彼は求道してまもない日の礼拝後、自発的に悔い改めの祈りをされ、ポケットから“たばことマッチ”を取り出して私に差し出し「今日からたばこを止めます。」と誓われ、以後、禁酒禁煙の人になられました。１９３２年秋に受洗されました。

入信後彼は上官の信任殊に厚く、また部下を愛する心厚く軍隊における曹長は、週番勤務がないのに自発的に夜中に起床して隊内各所を巡視し、部下の労をねぎらい服務を激励するとともに家庭に恵まれない部下には、福音を証しして慰めるなど人情ぶりを発揮するようになり、またある演習地では病人がいるのを知って、演習に行く毎にその病人を訪問してイエス・キリストの救いを語って見舞い、帰隊しては「伝道新聞」を送るなどして弱き者、貧しき者の友となることを喜んでおられた。また、部下からも尊敬されるようになりました。（三好姉は、当時多くの「天国新聞」をご主人から各地に発送するように言われて発送したと語られた。）

三好つる江夫人は、筆者の牧師が浜田から益田教会に転任後、イエス・キリストを信じて受洗され、珍しい軍人のクリスチャンホームが誕生しました。三好兄

は責任観念の強い人で、間もなく教会の役員に選ばれ会計係となり、集会出席に教会の財政援助に惜しみなく奉仕しておられた。（この他に実家への送金があり、家計には余裕はなかったとの事。）

昭和８年１２月、３０歳で特務曹長に昇任するも誇らず、現役軍人としては稀に見る熱心な信仰の人で入信以来、キリスト教とは縁遠い様に思われている軍隊内にあって堂々と信仰を発表し、機会ある毎に同僚や部下に主の救いの福音を証しし、常にポケット用の聖書を身より離さず愛読しておられた。

その後の戦地からの便りにも、戦地に於いて部下を集めて聖書を語り、聖歌を賛美し教えているとあった。（故人の愛唱歌は「ゆきのごとく。聖歌７１８番、特選２４番」です。）

１９３７年（昭和１２年）支那事変突発後間もなく、彼は中国大陸の戦地へ出征した。同年１０月に、戦闘に於いて足を負傷し、暫く第一線を退き、病院生活を送るも全快し、再び戦線に立ち奮闘していたが、翌年１月はじめに所属部隊が河北省から山東省に移動し、鉄道警備と匪賊討伐にあたっておられた。

当時彼は、准尉であったが兵卒上がり軍人としては最高の陸軍歩兵少尉にまで昇進し、長年の念願を果たした。地上の多くの軍人が地位、名誉を誇る勲章に優る、神の国キリストの精兵卒として、「信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前で立派な告白をしました。」（Ｉテモテ６章１２節）と福音の兵士として、ただ主の十字架を誇る、彼は昭和のコルネリオでありました。

彼は戦死直前のある日曜日、中国山東省のある部落にキリスト教会があることを知り、陸軍少尉の軍服のまま教会に近づいたところ、子供たちが礼拝中の教会内に、“日本軍来襲”と知らせたため礼拝は中断、大人も子供もクモの子を散らすように逃げ惑う有様に困惑したとのことでした。

中国語が分からない彼は一瞬戸惑いましたが、とっさの機転で『アーメン。アーメン。ハレルヤ。ハレルヤ。を連呼して手招きしたところ、会衆は安心して戻ったため、一緒に礼拝を守ったとの便りを貰い感激しました。

三好政明兄が戦死したのは、１９３８年（昭和１３年）３月１６日、３４歳でした。

『死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。』（黙示録２章１０節）、『私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。』（Ⅱテモテ４章７～８節）

戦死後、遺骨と共に「遺品」がかえってきましたが、少ない遺品の中に、彼の愛読していたポケット用寸珍聖書が含まれていました。彼は厳しい戦場にあっても、聖書を肌身離さず身につけていたことが分かります。

三好つる江夫人は、「夫」の戦死の報を受け、遺書を開封したところ、戦死したら葬式は松村司先生に依頼するようにとあった由で、三好夫人から依頼状が来て、米子から浜田に行き、当時としては珍しい、軍人のキリスト教式の葬儀を私が司式しました。流石は三好兄といった感じで、良き証、伝道の場となりました。

【遺書より】（抜粋）

元気で居る、しかし何時やられるか判らない。

それが戦争の常軍人の宿命なることを理解し、

再び故国の土を踏み得ざる時あるも、笑って昇天を祈ってくれ・・。

（戦地より戦死を予想してか夫人に宛てた遺言状を拝見すれば、万一戦死して無言の凱旋をした場合はキリスト教で葬儀することとあった。噫！君は故国に凱旋せず、戦地より直接天国に凱旋したのだ。）

三好夫人の述懐によると、三人の遺児を抱えて実家に帰った夫人は「たんす」に聖書を隠して“盗み読み”しながら、「隠れキリシタン」の如くに信仰を保持してこられたとのことでした。（１９６８年１１月。松村生）

【信仰に生きた夫】

主人はクリスチャンで信仰に生きていました。

お国に捧げた身ですから戦死はもとよりの覚悟で出征する時すっかり遺言をしていましたので今更思い残すことは少しもございません。

唐土（もろこし）に花と散るべきわが身をば

今日も守りぬ神の御恵

これが主人の気持ちであり、そしてこれがついに、辞世の歌となりました。

（大阪朝日新聞島根版に載った三好夫人談。その当時）

キリスト兄弟団勝山教会創立３０周年誌記事より

規律厳しくない自衛隊

（父と自衛隊〈僕の幼少期〉）

単立馬橋キリスト教会　会員　谷 二郎

僕の父遼一は、明治 40 年生まれですが軍隊の経験はありませんでした。世田谷区池尻にある自衛隊中央病院付属の「自衛隊職能補導所」（1956 年発足）〈現：職業能力開発センター〉の初代所長でした。

僕は 1947 年生まれですが、僕が幼少の頃、父は国立相模原病院で傷痍軍人のための義手義足を作っていました。僕は瞼の手術を受けるため小学校入学前にその木造病院に入院したことがありました。入学式の白黒写真には、目の周りに赤チンの跡が残っていました。一年生の時に近所の子供達と「馬橋キリストの教会」（馬橋キリスト教会の前身）教会学校に五円玉を握って通いました。薄目を開けて献金したこと、劇をやったこと、分級の折り紙で鶯を折ったことを覚えています。

父は、相模原病院のあと、早稲田にあった厚生省の国立身体障害者更生指導所で課長をしていました。

自衛隊が発足（1954 年）して間もなく、訓練で障害者となった隊員の職業指導をする上記施設を作るために、父は防衛庁に移りました。補導所の指導内容は、木工被服通信タイプ等があったように記憶しています。

若い教官達は、新年会などで我が家に集まったりして、制服でハーモニカを吹いてくれた人もいました。また、僕は何度も父の職場訪問をしたので、教官達に可愛がられました。

補導所の隣の建物は、看護職の婦人自衛官の宿舎で、子供心に「女の自衛隊だ～」と、珍しくてワクワクしました。

父の送迎はジープを使っていましたので、小学生の私は毎朝のように、父が出発する前にジープに乗って遊んでいました。少し動かしてもくれました。運転手はハーフなのかアメリカ人みたいな顔をした、名前も聞き慣れないカミベップさん。子供心に「アメリカと戦争になったらどうするんだろう」などと考えたりしました。近所の医官二人も通りがかりに乗せていました。たまに僕も同乗して、役所に行きました。

父が体調を崩した時、Ｔ医官は近くなので往診してくれて、石鹸水で浣腸してくれました。おしりを抑えながら便所に走り込む父の姿が今でも目に焼き付いています。家では威厳はありませんでした。父が病気で何日か休んだ時には、僕がジープで給料をもらいに行きました。女性教官のＦさんが「所長さんの椅子に座りなさい」とか言って給料袋を渡されました。銀行振込の無い時代、６人家族の我が家では金欠になっていたのでしょう。

明治神宮外苑の絵画館前で行われた自衛隊記念日のパレードを見に行って、拳銃を持たせてもらい、「これが安全装置」とか説明を聞きながらいじらせてもらいました。階級章を覚え、長官直轄部隊などの肩章のシンボルマークを覚え、また中央音楽隊のコンサートにも行きました。

そうそう、父が退職間際だったのか、九州のほうに出張があった時、兄と一緒に連れて行ってくれました。シビル(背広組)の父が整列した自衛官の栄誉礼を受けているのを見て「偉い人なんだな～」と認識させられました。父には威厳がありました。

その晩は部隊で食事をし、隊員と一緒に寝ました。不寝番が武器を持って部屋の入口に立っていました。

父とは途中で別れて、兄と二人で兄の生まれ故郷の松江に行きました。これは父からの最大の体験プレゼントでした。

本来規律が厳しい自衛隊なのでしょう。今じゃ許されないことなのかもしれませんが、なんと鷹揚で融通のきく呑気で愉快な昭和三十年代の良き時代だったことでしょう。

このような体験が私を自衛隊大好きに育て、私の人生に大きな影響を及ぼしたのです。「命をかけて国を守る」という愛国心に燃えていました。

第一志望の大学受験は、防衛大学。受験誌を調べたら「校」が付いている。海上保安大学校にも「校」が付いているから、警察とか制服を着るところは、「校」が付くんだなと、変に納得しました。

防大受験を父が喜ぶかと思ったら、困惑した顔をしたのが意外で、すごく印象に残っています。父は、まだできていなかった防衛医科大に入れたいとよく

言っていました。

お金を入れる双眼鏡で憧れの小原台の防大を“偵察”したり、兄の友達の友達が防大に入っているので、訪ねて行って学生の居室を見せてもらいました。その時、校内放送で「〇〇学生、ヒトゴーマルマル……」と聞いて、「うわー、自衛隊的」と思いました。開校記念祭で棒倒しを見たり、ファンシードリルを見てカッコイイと思いました。品川辺りで防大生を見てそのうちあの制服を着るんだなと、思いは募るばかりでした。

一次試験合格です。一般の大学より試験が早いため高校の校長がみんなを励ますためか、朝礼で「(本校に) 補欠合格した生徒が頑張って防衛大学に受かった」と話したので、「僕のことだ～」と驚いたものです。でも、二次試験で落ちました。身体検査でパンツまで脱がされたのに～、残念無念！

そして日大理工学部工業化学科の道へと進んだのです。　　(次回につづく)

月例会動画の案内

コルネリオ会月例会における牧師先生らのメッセージをコルネリオ会（JMCF）ホームページにアップしております。毎回様々な視点から信仰の糧となるテーマでメッセージをいただいております。見逃された方、興味のある方は是非ご覧ください。

http://jmcf.s302.xrea.com/index.html

2023 年 11 月　「主の姿に倣って」
～コリント人への手紙第二 3 章 18 節から 4 章 16 節～
武庫川キリスト教会　協力牧師
井草　普一

2023 年 12 月　「神の平和、神の涙、神の心」
～世界回復のため神と共に働こう～
日本イエス・キリスト教団 京都信愛教会/明野キリスト教会 牧師
大頭　眞一

2024 年 2 月　「信者にある２つの思い」
～ローマ人への手紙 8 章 5 節から 11 節～
恵みキリスト教会　牧師
藤原　幸生

2024 年 3 月　「普遍的な教会の姿：４つの柱」
～使徒の働き 2 章 42 節～
日本同盟基督教団　馬堀聖書教会　牧師
徳梅　陽介

献金感謝（2023.11.1-2024.2.29）

皆様の献金を心から感謝します。

宮岡修二、常盤一崇、石川信隆、大頭眞一
今市宗雄、小島健二、瀬在道晴・米子
海野幹郎、圓林栄喜・さゆり、吉田 靖
石井克直、荻原洋聡、矢田部和子
森 祐理、下桑谷玲子、康田洋子、尾崎伸作

献金振込先は次のいずれでも結構です。
① 郵便振替口座：00130-3-87577
(コルネリオ会)
② 銀行振込口座：三菱ＵＦＪ銀行　和光支店
店番 505　口座番号 0385701　ジェーエムシーエフ　ナガハマタカユキ
③ ゆうちょ銀行　〇一九(ゼロイチキュウ)店
当座 0087577　コルネリオ会

編集後記

今回の「昭和のコルネリオ」は、畑中孝三先生（基督兄弟団元牧師）からいただいた資料です。畑中先生が旧軍のクリスチャンのことが書かれた証し文があるので読んでいただければと渡されたのがきっかけです。旧軍にも少なからずクリスチャンがおられ主にある歩みをされていたことが分かる内容でしたので掲載させていただきました。

もう一つの「規律厳しくない自衛隊」は、馬橋キリスト教会で一緒に礼拝や教会学校の奉仕をささげていた谷兄の証しです。時代背景が認識できるよう、当時の表現で書かれています。

ニュースレターに掲載したい記事、特に信仰面での葛藤や恵み等分かち合いたいことがあれば下記まで気軽に相談ください。皆さんの投稿をお待ちしております。

編集子

連絡先：〒312-0024
茨城県ひたちなか市勝倉 3433　C-101
hsenrin@gmail.com
圓林栄喜（えんりんひでのぶ）